花冠の花嫁

瑠璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花冠の花嫁

【Ｎコード】
Ｎ９９９８Ｓ

【作者名】
瑠璃

【あらすじ】
とある世界のとある国。
主人公マリアはミーレッシュ公爵家の末娘。
すごく派手な家族のせいで、いろいろ期待されてしまうマリアだけど…
本人はいたって地味で。
コンプレックスのある少女がそれを乗り越えておとなになっていくお話しです。

1．プロローグ

わたしはマリア。
マリア・スノーフレーク・フォン・ミーレッシュ。
ミーレッシュ公爵家の一番下の女の子。
公爵家っていうからには身分は国の中だと上から数えたほうが断然早いんだけど。
身分より何より家族がすごい。

お父様は国の頭脳って言われるぐらいに頭のいい宰相殿下で公私において国王様の右腕。
お母様は国王様の妹で国の華って呼ばれたぐらいの金髪・碧眼の絶世の美女。
お兄様は騎士団で次期近衛隊長って噂されている腕のたつ騎士。
お姉様はお母様の美貌を受け継いだ美女で頭もすごくよくて社交界の華って呼ばれている。

あまりに家族が派手だからわたしも色々期待されていたみたいなんだけど…
わたし自身は、国の頭脳と言われるお父様の賢さも絶世の美女といわれたお母様の美貌も受け継いでいない。
いたって平凡だと思っている。
家族の中で一人だけ、髪の色は赤だし、瞳の色は緑だし…。
一応、お父様のおばあ様がわたしと同じ髪の色と瞳の色だったらしいんだけど…。
「あなたは森から拾ってきた子なのよ」っていわれても驚かない自信がわたしにはある。

これから始まる物語はそんなわたしの社交デビューのお話。

色々不安だし、家族の恥になるのは嫌だから逃げちゃおうかと思って、逃亡計画もたてたけど。
わたしのことをいつも見守ってくれて、世話をしてくれるマーサに見つかってしまったからには逃げられなくなっちゃった。
一応公爵家に生まれたからには社交デビューは義務みたいなもの。いままで何とかなってきたから何とかなるって信じて頑張ってみようと思う。

それでは、はじまり、はじまり。

2．ミーレッシュ公爵家のマリア

（あっ、鳥が飛んでる。何の鳥だろう？今日も空がきれいだなぁ。）

ここは、ミーレッシュ公爵家のわたし、マリアの部屋。
クッションや壁紙はピンクとオフホワイトを基調としたかわいい感じの内装。
それを、椅子や机、ソファーの茶色が引き締めている。
窓際に置いてある椅子とちょっとした机は、私がお茶をしたり本を読んだりするときのお気に入りの場所だ。わたしは今、そこに座っている。

「…ですから、公爵家の令嬢としてふさわしい行いを……。聞いておられますか！！マリア様！」

ぼーっとしていたら、目の前にいきなり乳母で私たち兄弟の生活のすべてを任されているマーサのアップ。
いけない、いけない。
今は絶賛、お説教中だった。

「いいですか、マリア様。私（わたくし）も外にいきたいというマリア様のお気持ちがわからないわけではありません。ですが…マリア様はもうすぐ１６歳。あと１か月で社交デビューなのです。」
「社交デビューをしなくちゃいけないのはわかっているわ。だから、おとなしく、ダンスの練習をして、休憩がてら、刺繍をしていたんじゃない。」
「…リネン室に忍び込み、使用できなくなったシーツを集め、つなぎ合わせることを刺繍というとは私、マリア様よりも長いこと生きておりますが、初めて知りました。」

「……。」
（もう現場をおさえられてしまっているんだから、ごまかしようがないわよね。）

そう、わたしはマーサが主導のもと行われている「マリア様華麗なる社交デビューのための準備」の毎日から抜け出すために、逃走経路を確保しようとしていたのだ。
わたしの部屋は2階にあるのだけれど、窓の近くにつたって1階まで降りられそうな木はない。
窓の下は植え込みだから多少滑ってけがをしても大丈夫だろうと思って窓からシーツをつないだものを垂らして、それを命綱にして逃走を試みてようとしていた。
（今回は父様や兄様が一緒じゃないから男装しようと思って…兄様の幼いころに来ていた服も準備していたし、髪もまとめて帽子に入れてしまえば大丈夫だと思ったんだけどな。まだ使えるシーツだともったいないと思って使えなくなったシーツをリネン室に取りに行ったのがいけなかったかしら。マーサはこの時間、姉様の御用事があるから目を離すはずだったのに…）

「…マリア様！また、聞いておられませんね。ここまで言われても、私にいわなければならない言葉がわかりませんか！！それにベラとクリスも懐柔して。二人にも罰を与えなければなりませんね！」
視界の隅に今まで下を向いて神妙にしていたベラとクリスがビクつくのが見えた。
（いけない！ベラとクリスまで巻き込んではいけない！）

ベラとクリスは私の侍女だ。
流行に詳しくにぎやかなブロンドで赤い瞳をもつベラに、物静かで優しいブルネットで紫の瞳をもつクリス。
正反対な二人だけど、頼りになるわたしの大切な大切な友達でもあ

るのだ。

「ごめんなさい。」

わたしは立ち上がって、マーサに頭を下げた。

（「もうしません。」はうそになるから言えないわ。）

それを見たマーサはため息をついたあと言った。

「お座りになってください。マリア様が街に行き、外の様子をご覧になりたい気持ちはとてもよくわかります。これまで、お父様やお兄様と一緒にお忍びで出かけられていたのですから。特に、この時期は貴族の子息・令嬢の社交デビュー・謁見に合わせて街も盛り上がってにぎやかですからね。ですが…今年からはいけません。マリア様は今年、ミーレッシュ公爵家の令嬢として国王陛下に謁見され、社交デビューされるのです。大人の仲間入りをされるのです。子供だったら許される行いも大人になったら許さないものもあります。わかりましたね。」

「……。……。」

「わ・か・り・ま・し・た・ね・！」

「……はい。」

この失敗によって、わたしに対する包囲網はかなり厳しくなってしまったのだった。

3．旦那様と奥様の考え

「…ということがあったらしいの。アラン。」
ミーレッシュ公爵―マリアの父は、王宮から帰宅したあと、妻と語らうのを常としていた。
もっぱら最近の話題は末娘、マリアのことである。

「今月に入って脱走騒ぎは3回目です。もともと、刺繍や詩歌の朗読よりも、ダンスや乗馬を好むような子ですし。社交デビューに向けて、苦手な部分ばかりの練習となれば、いろいろと難しいんですわ。マーサの意気込みもからまわってしまっているのよ。」
小首を傾げて、困ったように微笑む妻の様子をみて、苦笑しながらアランは答えた。

「まだまだ、子供だからね。この間まで、子供だからダメといわれていたことがよくなり、子供だから許されていたことが許されなくなるのに折り合いをつけられないんだよ。テルスの拝謁やデビュタントでの作法を見ているから、何をやらなくてはいけないかはわかっているはずだ。その上での緊張もあるだろうしね。最低限のことはやっているんだろう？」
「ええ。作法や衣装も大丈夫ですし、他のことも問題のない範囲でできるという報告はありました。私（わたくし）もできるときは一緒に練習をして確認しております。今は仕上げの段階ですから、これといって問題があることはあるわけではないんですけれど…。やはり末っ子だからかしらね。こんなにいろいろなことが目についてしまうのは。」
脱走騒ぎはきっかけにすぎない。他の兄弟のときにもあったことだが、子供から大人への羽化期の危うさはどうしても親は心配になってしまうものである。

特にマリアは危うくみえてしまうのだった。

マリアの兄、アーサーのときにはすでに拝謁・デビューの段階になったときには他の貴族の子弟と一緒に騎士団の学校に行っていたため、厳しい学校生活にもまれるうちにあっという間に大人になっていたという状態だった。

マリアの姉、テルスのときにはおとなしい性格もあってか、それほど目につかなかった部分であった。

「まだまだ難しい年頃なのだよ。わたしたちの役目はいざとなった時に、手を差し伸べられるように準備しておくことじゃないか。」
「そうですわね。私(わたくし)たちにマーサが報告していることは、マリアも知っているでしょうし。夕食のときに少し話をしてみましょうか？」
「そうだね。そうすることとしようか。」

―コン、コン。
ちょうどそのとき、ドアをたたく音が聞こえた。
アランが入室を許可すると、顔を出したのは、噂をしていた娘。
息はあがっているし、髪も乱れている。
「父様、母様。お夕飯ができたって。父様がお夕飯の時に帰ってこられているのは珍しいもの。一緒にご飯を食べるのを楽しみにしていたのよ。」
あきらかに廊下を走ってきたことがわかる状況に公爵夫妻は苦笑し、一緒に食堂に向かったのだった。

4．兄様と姉様の考え

「マーサに聞いたぞ。マリア。また脱走騒ぎをおこしたんだって。」
夕食前に家族の居間で、姉様に「今年の流行の髪型」なるものを教えてもらっていたら、いつの間にか帰宅していた兄様がニヤニヤ笑いながらわたしに言った。

ちなみにわたしは、「流行の髪型」なるものに
どうしてそんなに装飾品をつけるのか？
そんなに高く髪を上げることに異議はあるのか？
首が痛くならないのか？
背の高くない紳士諸君にはいただけない展開なのではないか？
などあげれば限がないほどの疑問をいだいていたが、姉様が私のデビューのためを思って伝えてくれているものなのだからと思って黙って聞いていた。

「兄様、帰ってきていたの？帰ってきていたら、わたしたちに何か言うことがあるんじゃなくて？」
（マーサのおしゃべり！すぐに言っちゃうんだから。帰ってきてそうそう兄様もそんな風にからかわなくてもいいじゃない。）

少々気まずくてそういうと、兄様は、
「それもそうだな。ただいま。テルス、マリア。」
（そうやってこっちの気持ちを読んだように、素直に答えられるのがまた、イライラするのよ。）
そんな妹の気持ちを知ってか知らずか、
「おかえりなさい。アーサー。」
と、言った姉に続いて、少々ふてくされながら
「……おかえりなさい。兄様。」

と言ったマリアであった。

「でもマリアも甘いよな。マーサにばれるなんて。」
「そんなこと言ったって、マーサが姉様についていることが分かった時に決行したのにすぐに見つかったのよ。」
「マーサが家にいるときにやるっているのが甘いんだよ。計画は綿密にチャンスは1回と思ってやらないとうまくいかないぞ。」
頭をなでられながら言われるとひどく幼くなった気がするけど嫌いではない。
「そうよ。実行するときにはわたしも仲間にいれてくれなくっちゃ。こんなに近くに協力者がいるのに頼ってもらえないとさみしいわ。」
微笑む姉様に抱きしめられて、なんだか涙がでそうになった。

思わず下を向き、
「うん。」
と答えた。

―トン、トン。
ドアをたたく音がし、兄様が入室を許可すると、メイドが食事の準備ができた旨を伝えてきた。
そのすぐあとにマーサがやってきて父様が帰宅されていることを告げた。

「じゃあ、わたし、呼んでくるわ。」
いそいで、部屋を飛び出し、駆け出したわたしを見て、後ろからマーサの呼ぶ声が聞こえた。
「マリア様！淑女はそんな風に走りませんよ！マリア様！」

「マーサもマリアには苦労しているな。」
走り出したマリアを追いかけて行ったマーサを見て、アーサーは苦笑した。
「でも、わからない気持ちではないわよね。」
答えたテルスの真剣な顔を見て、アーサーは表情を改めた。

「大人になりなさいといわれることに、反感を覚えているのよ。わたしやあなたを見ているから、求められていることはわかっても、まだ心がついていかないのよ。それに最低限必要なことは、あの子、しっかりやっているわ。」
「わからない気持ちではないね。」
「あなたとわたしは、幼いころからフレッドの遊び相手として王宮に行っていたから、何を求められているかには敏感だったし…わたしたち以上に早く大人にならなくちゃいけない人がそばにいたからね。」
「そうだな。俺たちは同い年だけど、マリアと殿下は4つ年が違う。一緒に王宮に行っても、そこまで目につかなかっただろうからな。」
答えるアーサーを見て、テルスは苦笑して言った。
「わたしたちしかいないところで、フレッドのこと殿下なんて呼ぶと、またあの人すねるわよ。」
「騎士病だ。見逃せ。」
「わたしが見逃したら、だれがあなたに注意をするの。それこそフレッドに対する裏切りだわ。」
さらっと答えたテルスに痛いところを突かれたアーサーだった。

「さあ、そろそろいかないと、わたしたちが今度はマリアに迎えに来られてしまうわ。」
「そうだな。」
「マリアの中の変化はデビューしたら少しづつおこると思うわよ。それがいい方向の変化になるようにするためには、わたしたちの手

助けが必要だと思わない？」
「よし、経験者として、力になれるように準備しておかなくちゃな。」
「からまわりしないように気を付けてね。」
しっかり釘をさされ、何ともいえない気分で食堂に向かうアーサーだった。

5．マリアの考え

（まったく、うちの家族はみんな甘いんだから…。）

夕食を食べ終わり、家族でお茶をした席では、脱走騒ぎのことが主な話題で…社交デビューしたくないのか、脱走するくらいなら、街に一度行くかなど、いろいろな提案がされた。

でも…マリアは断った。

別にマリアは、街に行きたいから脱走するのではない。

今までは午前中の勉強の時間は決まっていたけれど、午後の自由時間は決めつけられることはなく、基本、自由にやることを決めて過ごせていた。

しかし、拝謁の許可が出た三か月前からマリアの一日は一気に窮屈になった。

やりたいことよりも、やらなくてはいけないことが決められる。

午後の自由時間で、大好きな乗馬はほとんどできなくなった。

不満を述べれば、「大人になるのですから。淑女は基本、馬車で移動するものです。」と言われる。

「別にわたしは、何もかわっていないんだけどなぁ…。」

脱走は決めつけられることへのマリアの抵抗なのだ。

マリアも女の子だ。

きれいなドレスにも、きらきら光る宝石にも興味はあるし、お茶会にでるクリームのたくさんかかったお菓子も食べたい。

舞踏会で素敵な紳士に見初められて…なんていうロマンチックな小

説に憧れないわけでもない。

でも、周りの期待は正直、重い。
父は宰相。
母は絶世の美女。
４つ年上の双子の兄弟も、兄は次期近衛隊長と呼ばれるぐらい優秀だし、姉は社交界の華と呼ばれている。
マリアには特に、得意なこともないし、過去をさかのぼってみても、ほかの人よりもできると認められたものはないと思う。
周りが優秀な分、期待されすぎて、がっかりされることも多かったのだ。

容姿も一人だけ平凡。
両親も兄弟も金髪なのに、マリアだけ赤毛。
瞳の色は父と一緒の緑だけど、マリアの色のほうがくすんでいる。
この国では王家の家系に金髪・碧眼が多いため、それが好ましいとみられる風潮がある。
そんな中で自分だけが異端に思えてくる。

（金色に近い赤で、ストロベリーブロンドって呼ばれるんだったらよかったのに。）

ミーレッシュ家のマリアではなく、ただのマリアを見てほしい。
他の誰かと比較するのではなくて、ただのマリアを見てほしい。
近頃のマリアの願いはそれなのであった。

1. 準備

（とうとう、この日が来ちゃったな。）

あれから結局、脱走することはかなわなかった。
でも一度は見かねた兄様がこっそり街に連れて行ってくれて…たくさんのお店を見て回れて楽しかった。いつものわたしに戻れた気がした。

その日は朝から忙しかった。
日が昇る前から起こされて、お風呂に入れられて、髪と体を入念に洗われる。

昨日からマーサは、今流行りのバラのエキスを使ったものを使うって張り切っていたけれど、残念ながら、わたしがあまり強い香が好きではない。
自然に咲いているバラならきれいだと思うし、香も素敵だけど、エキスや香水ってなると、香がきつく感じられて、気分が悪くなってくるのだ。
まだまだお子様なわたしには似合わないと思うしね。

苦手だと知っているベラとクリスが反対してくれて、それでもマーサが譲らないのを見かねた姉様が口添えしてくれて、やっと、わたしが気に入っているレモンとハーブの香りのエキスとポプリを使うことが決まった。

「特別な日にいつもと同じだなんて…」
と、マーサは言っていたけど、ここはわたしの意見を通してもらう。

気分が悪くなって、謁見前に気絶ではかっこ悪すぎる。

この日のために誂えたドレス。
拝謁用のドレスの色は白って決まっている。
乙女の純真さを表すため…らしいが、確かなことは不明。
決められた中でその中でどれだけ工夫をできるかが勝負になっているらしい。
姉様のときにはウエスト切り替えのシンプルな形。
でも、その表面に信じられないほど細かく刺繍が入っていて、大人っぽい姉様にはとても似合っていた。
わたしはというと…胸下切り替えのドレス。ウエスト部分は同じ白だけど生成りっぽい色のリボンで結ぶことにした。
デコルテがきれいに見えるっていうことで胸元はスクエアカットにしてもらった。
胸下切り替えのドレスって…胸が豊かな人が着ると、そこが強調されてしまうんだけど…
残念ながらわたしにはその心配は不要だった。

化粧はなるべくシンプルに。
あまり色を乗せると、けばけばしくなってしまって、デビューにふさわしくないらしい。
ベラの提案で、ピンクとオレンジを基調とした感じに仕上がった。

髪型もオールアップするように決められている。
すべて上げてしまうと、顔が丸いのが目立つから、顔の周りの髪だけ少し落としてもらった。
髪飾りはあえてつけない。
しかし、ティアラはつける。
ミーレッシュ家代々の家宝の中にもティアラがいくつかあるんだけど…

その中のひとつ、鈴蘭をモチーフにしたものをつけた。
わたしの名前に入っている「スノーフレーク」は実は花の名前。
鈴蘭に似ている花だ。
それに気づいてこのティアラにしようと決めた。

あとは靴。
靴も白でそろえた。
ヒールが高いといざという時に転ぶといけないからなるべくローヒールにした。
マーサはもう少し高いほうがきれいに見えるっていっていたけど、わたしの普段のお転婆ぶりを知っているから…ここは強く反対しなかった。

こうして、いつもとは全然違う、「マリア・スノーフレーク・フォン・ミーレッシュ」が鏡の前にいる。
柄にもなく緊張していて、瞳には不安が見える。
髪はクリスが一生懸命、お手入れしてくれて、いつもよりも艶もあってきれいだけれど…やっぱりただの赤毛だった。
いつまでも、うじうじしていても仕方がない。

（わたしは、わたし。いつも通りに。）

いざ、出陣である。

2. 馬車の中

ーガラ、ガラ、ガラ。

馬車の中にはマリアひとりだ。
通常、良家の子女がでかけるときには、エスコート役もしくは侍女が必要だが、初めての謁見ーデビュタントにはひとりで行くことがルールとされる。

屋敷をでるときには家族に励ましの言葉をもらった。
兄様からは「側にいられないけど、心は側にいる。頑張れ。」といわれ、頭を撫でられた。
姉様からは「おじ様やフレッドに会い行くって思えば大丈夫。」と言われた。
母様からは「あなたはミーレッシュ家の自慢のプリンセスだから誇りを持ちなさい。」と言われ抱きしめられた。
父様からは「いつもの笑顔を忘れずに。」と言われた。
わたしはそれに頷くのに精一杯だった。

馬車の窓に顔がうつる。
緊張しているのか無表情でこちらを見返している緑の目。
綺麗に装っているが不安が全面にでている。

脱走騒ぎをおこすたびに日中、マリアはひとりで過ごす時間がなくなるようになった。
様々なレッスンをして疲れ果ててベッドで眠る日々。
久しぶりに自分と向き合った気がした。
社交デビューが決まってから心の奥にあったモヤモヤ感が体に広がる。

（謁見が嫌なわけじゃない。おじ様に会いにいくだけじゃない？！
舞踏会のダンス！？ダンスのステップはばっちりよ。）

そういうことが不安なのではない。

（…わたしは他の人からどういう評価を受けるのかな。周りは兄様や姉様みたいに何でもできることを期待しているんだろう。わたしは淑女らしく女の子らしくなんて得意じゃない。得意なものや人より優れている部分なんてない。絶対、ボロがでてしまう。）

怖いのは今からマリアがすることが人から評価されること。

何か悪いことを言われるのはわかっている。それで自分が傷つくかもしれないこともわかっている。もしかしたら家族にも迷惑がかかるかもしれないことも…

（…でも…それを受け止める覚悟ができない。）

人の目が怖い。

手がふるえだす。

（ドレスを掴んだらシワになっちゃう。）

変なところは冷静で笑えてくる。

マリアは両手を握りしめて震えをおさえるように努力していた。

3．騎士団の人

震えを抑えるために必死でマリアは手を握っていた。

―カラ、カラ、カラ。

馬車の振動が変わってきた。

屋敷から王宮までの道のりは道が整備されていないため振動が強く感じるが王宮の外門を入ると石畳になる。

（もう王宮内にはいったんだ…）

マリアがふと、顔を上げると馬車の窓から王宮を警護する騎士の姿が見えた。

（騎士…。そういえばあの方は失礼だったけど…不思議な方だったわ。）

マリアが一番身近で知っている騎士団の人と言えば、兄、アーサーだ。

その兄が脱走騒ぎばかりおこしているマリアを気遣ってか、上手くマーサに説明をして街まで連れて行ってくれたときがあった。

「兄様、ありがとう。連れ出してくれて。」

ニコッとマリアが言うと

「俺がマリアと出かけたかったんだからいいよ。」

とアーサーも笑っていた。

「マリア。実は、今日、友人も一緒に行きたいっていっていて街で待ち合わせすることになっているんだけど、いいか？」

「わたしは大丈夫だけど…街で約束してしまっているんだったらわたしが嫌って言ったらどうするつもりだったの？」
苦笑しながら聞くと、
「マリアはいいっていうと思っていたから。」
さらっと言われた。
「騎士団の方？わたし、会ったことある？」
たまに兄様のお友達が屋敷を訪ねてくることはあってマリアも挨拶したり話したりすることはあった。
「騎士団には所属してない。うちにも来たことはないなぁ。一緒にいて気持ちいいやつだよ。」
屋敷に来たアーサーの友人でマリアを悪くいう人はいなかった。

（兄様も認めている方みたいだし…大丈夫よね。社交デビューが決まってからもやもや考えてしまうことらあったけど、今日は楽しもう！）

マリアは気持ちを切り替えて、今日みてまわりたいと思っていた店に思いを馳せた。

街につき、御者に待ち合わせ場所をアーサーが指示するのを待って、待ち合わせ場所に急ぐ。

街の時計台の前につくと、
「アーサー、こっちだ。」
声がかかった。
声がする方に振り向くと、二人の青年がいた。

ひとりは茶色の髪、もうひとりは黒色の髪。
黒髪の青年が手を振っている。
近づいていくたと茶髪の青年は、マリアよりも頭ひとつ分背の高い

アーサーよりもさらに背が高く長身であることがわかった。
ちなみに黒髪の青年はアーサーより少し低いぐらいだ。

「悪い。ちょっと遅れたか」
「いや。わたしたちが早くついてしまったんだ。それより、そちらの令嬢が妹君か？」
黒髪の青年がいい、三人の視線がマリアに集まる。
「そうなんだ。俺の下の妹のマリア。」
「こんにちは。マリアです。今日はみなさんのお出かけにお邪魔させていただきます。お願いします。」
ペコッと頭を下げた。

それを見ていた茶髪の青年がふと言った。
「アーサー。お前の妹って金髪じゃなかったか。出かけるためにそんな赤毛に染めたのか？」

頭が真っ白になった。

4．街での出来事

（黒髪の青年がボリス、茶髪の方がエリックか）
先ほどの会話をマリアは思い出していた。

「金髪なのは俺と双子の上の妹の方だよ。マリアは他国から嫁いでこられた曾祖母の髪の色を継いでいるようでね。俺たち兄弟の中では一人髪色が違うんだ。」
エリックの「そんな赤毛」発言で表情を硬くしたことは、マリアの後ろにいてもアーサーにはすぐにわかったらしい。

「失礼な発言だった。すまない。」
エリックが謝ってくる。

（姉様がくると思っていたら、しょうがないわよね。こんな赤毛の娘がきたら…）
気分が沈んできたが、謝罪してきた相手に罪はない。

「いえ。お気になさらず。わたしは社交デビュー前で、家にいることが多いので、あまり公の場にでないですし…。兄様の話に名前は出ても、容姿のことまでは話題に上らなかったでしょう？」
「いやいや。花のようにかわいらしいとはいっておいたよ。乗馬が上手でお転婆だけれどね。」

（……なんてこと言っているのだろうか……）
丹精な容姿の兄に言われると、家族であっても顔があつくなってくるのがわかる。

「兄様。そんなお世辞はいりません。兄様がわたしのことを大事に思ってくれていることはわかっているけれど、そういうことをお友達にお話しすることはやめてください。」
「どうして？本当のことを言って何が悪い。」

（どうしてって……。決まっているじゃない！）

「わたしが恥ずかしいからです。」
顔を真っ赤にしてアーサーにくってかかると、正面で笑いをこらえるような声が聞こえた。
そちらを向くと、エリックが笑っていた。

「さすが女たらしだな。その手が妹にも健在とは…おそれいる。」

（兄様、女たらしって……）
剣呑な視線をアーサーにむけると、肩をすくめて答えをくれた。

（妹としては否定してほしかったわ。）
少々、力が抜けてしまったけれど、仕切りなおして、自己紹介をして、街を見て歩くこととなったのだ。

「マリア嬢。正確にいうと、兄君は騎士団のなかでは“人たらし”と呼ばれているんですよ。」
街を歩きながら、ボリスが話してくれた。

黒髪のボリスは兄様よりも年上で２３歳。
兄様の学生時代の知り合いで、元は騎士団所属だったが、今は要人の護衛任務に特化した別部門で働いているらしい。
要人の護衛任務に特化しているなんて危険が多いのではないかと聞

くと、
「自由気ままな次男坊なのでできることですね。いざというときに戦う面では騎士団と一緒ですよ。」
と笑っていた。
もともと、やわらかい印象だが、笑うとさらに人懐っこい感じだ。陽に照らされると、黒だと思っていた瞳の色が実は紺色なのがわかった。

「ボリス様。人たらしというと…？」
「学生時代からですが、アーサーは何かと注目されていたんですよ。公爵家の嫡男ですからね。彼のやることなすことに色々と手を出してくる輩がいたんです。力でねじ伏せることもできましたが、彼はそうせずに、少々話をしただけで、仲間にしてしまって。それは騎士団に入ってからもかわらないので“人たらし”です。騎士団に入団してからは男女問わずになったようですがね。」

（さすがは、父様の息子！）

「その話を聞くと、兄は父の息子なんだなとしみじみ思ってしまいます。」
答えると、ボリスは笑いながら、
「妹君にもそういわれるとなると、アーサーも認めざるを得ないと思いますよ。学生時代には宰相殿下に似ているといわれるたびに、自分は自分だ、といって反発していましたらね。」
「そうなんですね…。」

（兄様もわたしみたいに、自分は自分と言っていることがあったのかぁ。）

エリックと並んで前を歩くアーサーを見て、意外な気持ちになった。

「アーサー！」
歩いていたら声をかけれた。
騎士団の制服をきた青年が声をかけてきた。
何か兄様に用事があるようだ。
「ちょっと話してくるから、まっていてもらってもいいか？」
頷いて、了承の意を伝えると、アーサーはその青年の方に歩いていった。

道のすみによけてアーサーを待っていると、エリックがはなしかけてきた。
「ところで、とりあえず街の中央まで歩いてきたが、どこに行きたいんだ？」

茶髪のエリックは兄様と同じ２０歳らしい。
王宮で働いているらしいが詳しい部署などは話さないので、あえて聞かない。
言っていいことといけないことがあるのだろう。
兄様と並んでも支障のないくらいきれいな顔立ちだし、しぐさは優雅であるもの隙のない。
笑っているものの、裏がありそうな感じ。
最初の発言から…残念ながらわたしの印象はよくない。

「東通りの香草のお店と、南通りのお菓子屋さんにはいきたいです！そのほかには…デビュタントに向けて街も盛り上がっているようですから、出ている屋台などを少し見れたらうれしいです。」
すらすらと答えると、二人はびっくりしたようだった。

「お詳しいですね。失礼ですが…街にはよくいらっしゃるですか？」
貴族の令嬢はふつう、街には直接でないものだ。
欲しいものや見たいものがあったら、商人を直接呼び寄せばすむからだ。

「兄がわたしのことをお転婆といっていたでしょう。なんでも自分でやってみたくて、街に興味があって。父や兄にくっついて、よく来ていたのです。貴族の娘が何をと思われるかもしれませんが…。」
呆れられるかなと思いながら苦笑しながら答えると、

「別に、自分の興味があったんなら自分の足で確かめるのは当然のことだろう。女性だと難しいかもしれないが。」
意外なことに肯定をしてくれたのはエリックだった。

「父が寛容だったんです。母はいい顔をしませんでしたけれど。いろいろ見て歩くことで、知ることも多かったんです。」
「知ることというと？」
エリックがしっかりマリアの目を見て聞いてくる。

（エリックの瞳は茶色ではなくて、琥珀色なんだ…）

貴族社会では、直接顔を見るのではなく、伏し目がちに受け答えをするというのが男女が話すマナーとされる。
しかし、お互いのことを話すときに、伏し目も何もないとマリアは思っている。
相手のことを知りたいときには直接目を合わせて話さないと相手の気持ちはわからないのだ。
最初の印象はあまりよくなかったが、その姿勢に少し好感を持った。

「たとえば…」
マリアは周囲を見渡した。
デビュタントとそれに伴う街の祭りにあわせて周囲の店舗は活気づいている。

「デビュタントに合わせた街の祭りによって、街は活気づきます。それは祭りの準備のためだけではなくて、貴族がデビューのために必要なものを購入することによって、お金が使われることもかかわっている。物を注文すると、販売する商人だけではなく、それを作成する人、材料となるものを作る人も豊かになっていくこととか」

また周囲を見渡して目についたものをいう。

「街の看板は文字だけではなく、絵も一緒に書かれていて、字がよめない人にも支障がないようにえがかれていることとか…。わたしは街に出なければ、お金のまわり方も知らなかっただろうし、字を読めない人がいることも知らなかったと思うんです。そういうことを知ったうえで…わたしに何ができるだろうと考えることもあるんですよ。」

二人はびっくりしていた。
当然だろう。こんなころに興味を持っている令嬢はほとんどいないと思う。
姉様もわたしの話は聞いてくれるけれど、そんなに興味はないようだし…。

（こんな話、めったにしないのに、初対面の人になんでこんな話をしているんだろう）

「こんなことをたくさん話してしまってすいません。」

「いや、聞いたのは俺だから。君は…なかなか面白いね。」

（面白い??それって女の子にいう言葉??）

思ったことが顔にでていたらしく、大きな声で笑われた。

失礼だと、ボリスがとりなしてくれたが、エリックの笑いは止まらない。

裏のないきれいな笑顔だった。

（ちゃんと笑えるんじゃない。）

アーサーが話を終えたのか戻ってきた。

「なんでエリックはこんなに笑っているんだ?」

「いや、ちょっとな。じゃあ、行くか、マリア。」

いきなり名前を呼び捨てにされたのにびっくりしたが、嫌な感じはしなかった。

（面白いかぁ…）

お世辞ではなくて、わたしらしいことを認めてくれた気がした。

5．馬車どまりの向かいの窓

―ガチャ

馬車のドアが開いた。
びっくりして、そちらをみれば、驚いた顔をした御者が立っていた。
物思いにふけっているうちに馬車どまりにきてしまったようだ。

（どうしよう！！いろいろ考えていたせいで…頭真っ白だわ。）

「どうかなさいましたか？マリア様」

御者が心配そうにみている。

深呼吸を一つして、自分の手を見た。

（震え、止まっている。あんなに止まらなかったのに…）

顔を上げた。

エリックのおかげで、あんなに否定したかった自分を肯定できた気がした。
令嬢らしくないといわれるわたしを認めてくれる人もいる。

（“面白いわたし”を認めてくれる人はかならずいるのよね。）

心が落ち着いた。
御者の手を借りて、ゆっくり馬車を降りた。

「御者が扉を開けてから時間がかかっていたようだが、何とか降りてきたじゃないか。」

馬車どまりの向かいにある建物の3階。
馬車どまりからは巨木の影で気づかれない窓からマリアの様子を観察している人々がいた。

「きっと寝ていたんだと思うよ。案外図太いからな、マリアは。」
「図太い??俺が会った時には結構、自虐的だったぞ。ティアラのみっていうのも新鮮できれいだな。フレッド。」
「マリアが!!どんなマリアに会ったんだよ。エリック。口にクッキーのかすつけてても、つまみ食いはしていないって言い張っていたんだぞ。」
「…そっちに反応するのかよ。しかも、いくつのときの話だ、それ。」

観察していたのは、マリア達と一緒に街に出かけたエリックと、王太子フレッドことフレデリックだった。

王太子フレデリック・イキシア・ランドウィルは２０歳。
金髪・碧眼の王家の特徴を引き継いだ容姿をしている。
国王ががたいのいい、筋肉質の体をしているのに対して、王太子は細みであり、隣に並ぶと、ややひ弱な印象がある。
絶賛花嫁募集中であり、未婚の女性たち、またその親たちからは相当な狙いをつけられている。
そしてマリアたち兄弟の従兄弟にあたる。

「僕が、7歳で、マリアが3歳のときかな。でも三つ子の魂百まで

っていうでしょ。根本は変わってないと思うよ。」
「そんな幼いころのことをネタにされて、マリアも気の毒だな。」
「妹みたいなものだからね。一番下の兄弟はかわいがられるっていうのは万国共通じゃないの？マリアの次の馬車でおりてきたのが、今回の拝謁の令嬢の中ではピカ一の美人って有名なリベラ侯爵令嬢だよ。」
「ふーん。いまいちだね。美人なのは美人だけど、隙がない気がするな。」
「そのあとの黒髪の子が、刺繍とハープの演奏が上手なクリマト子爵令嬢だよ。その隣は歌声がきれいなリーズ伯爵令嬢かな。」
「そんな趣味の話をされてもなぁ。やっぱ、中身がどんなかわからないとお話にならんな。っていうか…お前、今回拝謁の令嬢の顔と名前、趣味まで網羅しているのか？」
「当たり前でしょ。いつ、結婚！！って仕掛けられるかわからないんだから。予防線を上手に引いておかないと、自分の首を絞めることになるし。僕の心の中で相手は決まっているんだから、余計な期待をさせちゃうとお互いに悲しいでしょ。」
「…上手に言えばそうだけどな。裏まで考えると、相当、黒いぞ、お前。」
「僕より、黒い君に言われたくないね。ちなみに…僕は僕のかわいい妹が心配で、こっそり見に来たわけだけど…。君はなんでついてきたの？」
「別にいいじゃないか。色とりどりの初々しい花を見学できる機会なんてそう簡単にはないだろ？」
「自前でなんとかすればいいじゃないか。シリスター皇太子エリック殿下。」
「……嫌味か？」
「嫌味っていうか牽制。初々しい花を見に来たなんていいながら、結局ほめたのマリアのことだけだし…なんでそんなにマリアが気になるの？アーサーの話だと、ちょっと一緒にでかけただけだろ？君

も、お嫁さんを募集中だったっけ？」
「たくさんいるなかで、知り合いがいたら気になるものだろう。」
「そういうことにしておいてあげるよ。何人も色々なところの令嬢が通っても見向きもしなかったことはちゃんと記憶しておくね。」
「…いい性格しているな。お前も。」
「お互い様でしょ。兄の一人としては大切な妹のこととなると、いろいろと考えてしまうんだよ。」
「気の毒だな、マリアも。」
「頼もしいの間違いじゃないの。」

フレッドが言うと、エリックは肩をすくめて答えた。

「そろそろ、準備しないと謁見に間に合わないんじゃないか。俺は、そのあとの晩餐会だけだから問題ないが。」
「もう、そんな時間か。じゃあ、そろそろ出ようか。」

ゆっくり窓辺の椅子から立ち上がりながらフレッドは答え、二人はその部屋をあとにしたのだった。

6．謁見前室

周囲を見渡してマリアは思った。

（結構たくさんの人がいるのね。）

謁見する前に、令嬢は一つの部屋に集められる。
今年デビューを迎える令嬢は２０人程度のようだった。
ちなみに令息の謁見は別日に行われる。
しかし、大抵の場合、謁見前から王宮で何らかの仕事をしている場合が多いため、それほど世間の注目はあびない。
だから、毎年話題となるのは、令嬢の方だ。
令嬢の場合は、親戚等は別として、公の場に姿を現すことは、謁見前はほとんどないことが常である。
ゆえに、謁見とそれに伴う舞踏会でのしぐさが“うわさ”としてイメージを決めてしまうことが多いのだ。

（姉様のときは、そうとう噂されてたみたいだから…。兄様と双子ということもあって話題は欠かなかっただろうし。）

テルスのデビュー前に、アーサーは王立騎士学校を卒業し、騎士見習いとして、王宮で働き始めていた。
アーサーも整った容姿をしているため、双子のテルスにも相当、周囲の期待はあっただろう。

（その噂を超えるほどの美女だもんなぁ～。姉様は。）

その兄弟の妹として、自分にもその手の噂が立っていることは想像に難くない。

（その期待が重いんだよね…。この容姿じゃ…。）

侍従に謁見前の前室に案内されながら、こっそりため息をつくマリアであった。

前室につくと、すでに何人かの令嬢が室内にいた。
ソファーと机があり、腰かけている令嬢が多い。
部屋の隅には飲み物とお菓子が用意されており、室内にいた王宮の侍女に言えば用意してもらえるようだが、それを頼んでいる人はいなく、室内は張りつめた様子だった。
先客に声をかけて、マリアも空いていた窓際のソファーセットに腰かけることにした。

「ここ、座ってもよろしい？」
「……」

相手は無言だ。
下を向いており、マリアが声をかけたのにも気づかない。
具合でも悪いのかと思い、マリアはその人の腕にそっと触れて、もう一度いった。

「ごめんなさい。御気分でも悪いの？人を呼んできましょうか？」

その人は驚いたようにして顔を上げた。

「申し訳ありません。大丈夫ですわ。ちょっと緊張してしまっていて…お恥ずかしいところをお見せしました。」

答えた令嬢は栗色の髪に、新緑を思わせる緑の目をしたかわいらしい印象の方だった。

「いえいえ。お気になさらずに。お隣、座らせていただいてもよろしい？」

「どうぞ、お座りになって。」

了承を得て隣に座る。

（緊張している人が多いや。当然だよね…。国王陛下にお会いするのはほとんどの人が初めてだろうし。この状態じゃ、緊張して、お互いのことは印象に残りにくそう。）

自分も馬車の中ではこんな状態だったらだろう。

今、そう客観的に考えられるのはエリックのおかげだ。

心に少し余裕がでてきたマリアはそう思った。

室内に置かれた時計を見ると、１０時４０分をさしている。

謁見室には、一人ひとり呼ばれて挨拶に行く形式だ。

名前を呼ばれるまで、ここにいる令嬢の身分はわからない。

マリアの謁見予定時刻は１１時と言われていた。

（緊張が和らいできたら、のどがかわいちゃった。まだ時間があるし、お茶をお願いしてもいいかな。）

隣に目をむけると、先ほどの令嬢の状態はかわっていいない。

（この方、少し飲み物でも飲んで、人心地ついたほうが、落ち着けるんじゃないかしら。）

もともと、人が困っているところを見ると、マリアは見過ごせない。どうしても気になって、声をかけた。

「お話してもよろしい？」

「……。」

また無言だ。

腕に手をおいて再度言った。

「お話してもよろしい？」

「……ごめんなさい。私（わたくし）ったらまた物思いにふけってしまって…」

「わたし、緊張してしまっていて、少し、人心地つきたくて、お茶をいただこうと思うんだけど、一緒にいかが？」

「えっ。」

「お隣に座ったご縁だし…一緒に付き合ってくださらない？」

きつい言い方にならないように気を付けて誘う。

その方は少し困ったような顔をしながらも了承してくれた。

苦手なものがないかを聞いたあと、席をたって、侍女に少々リクエストをして、お茶を頼んだ。

席に戻ると、マリアは再度、その方に声をかけた。

「頼んできました。」

「ありがとうございます。」

「それにしても、いい天気ですね。」

空を見上げて、マリアは続けた。

「晴れてよかった。わたしの叔母のデビューのときは、今にも雨が降りそうで、ドレスが汚れてしまわないか心配だったんですって。」

本当の話だ。
デビューは令嬢たちの中で本当に強い意味がある。
叔母もよく、テルスやマリアにそのことを言って聞かせた。

「でも、その叔母は、謁見後の舞踏会で叔父と知り合ったというんだから、悪い日ではなかったと思うんですけどね。」
「…私もそういう方と巡り合えたらと思います。」

小さな声だったけれど、答えてくれた。

そんな話をしていると、侍女がお茶を持ってきてくれた。
ミルクが多めでお砂糖を少し入れたミルクティー。
マリアが落ち込んだとき、元気を出したいときによく飲むものだった。

一口、口に含むとその方は言った。

「…おいしい。」

マリアも一口の飲んで、答えた。

「おいしいですね。わたし、元気になりたいときには、よくミルクティーを飲むんです。そうすると、落ち込んでいた気分が上に向かって、何事もいい方に向かうきがするんです。」
言うと、その方も笑って同意してくれた。

（同性のわたしがいうのも、おかしいけれど…笑顔がかわいい方だな。笑えるということは緊張も取れてきたのかしら。）

そう思っていると時間になったらしい。

「ミーレッシュ公爵令嬢マリア様。謁見のお時間でございます。」

侍従の呼ぶ声が聞こえた。

「はい。」

マリアは答えた。

「楽しい時間をありがとうございました。では、あとで。」

なるべく優雅に席を立つ。

そばにいた、侍女にも声をかける。

「おいしいお茶をありがとう。」

侍女は驚いたようで、眼を見開いていたが、

「ありがとうございます。」

と言って、頭を下げた。

周りの視線が自分に向いている。

（わたしは、わたしらしく。）

背筋を伸ばして、その視線に負けないように、前室をあとにした。

7．謁見室までの廊下

ドアを出て、静かに深呼吸をする。
背中に汗がつたうのがわかった。

周囲の人が、ミーレッシュ公爵令嬢という名と、マリアの存在を一致させるのが怖い。
名を呼ばれてから前室の出口のドアまでは、ほんの一瞬。
「わたしらしく」と言い聞かせても怖いものは怖い。
公爵令嬢らしく、にこやかに笑えていただろうか…それも不安だ。

でも、何とかその場を逃れたことにほっとした。
視線は感じたが、その意味までは判別できなかったことにも不安はあるものの、顔を上げてドアまで歩けた。
上々だろう。

「そんなに緊張するものか？前室が。ふつう、これからの方が緊張するんじゃないか？」

前を行く侍従が振り向き、声をかけてきた。

「でも、お前の場合、叔父と従兄弟に会うだけだもんな。緊張はしないか。でも馬車泊まりから結構緊張してただろ。そういえば、お前の名前を呼んだの、俺だったんだけど…。気づかなかったか？」

「っっっ！！なんで……」
「ちょっと。ここどこだと思ってるんだよ。大きな声は出すな。」

よく顔をみるとエリックだ。

自分のことで精一杯で前をいく侍従の顔まで見ていなかった。
驚いてしまい、目を見開いてしまう。
あわてたエリックに手で口を押えられ、脇の通路に連れ込まれる。
ひそひそ声で咎められた。
（謁見室までの通路だった！！ここで大声をだすと、衛兵が来ちゃう！！）
頷き、理解したことを示すとエリックはマリアの口から手を放した。
（でも…なんでここにいるの？馬車泊まりって…どこから見てたの！！しかもその恰好…）
驚くマリアをよそに、エリックは自分の手をみて「口紅がついた。」なんて顔をしかめている。
しかも、マリアの口紅がついた部分を、ペロッとなめるものだから、なんだか恥ずかしくなって赤面してしまう。
「…なんで顔が赤くなっているんだ。熱でもでてきたか？知恵熱？？」
手を額に伸ばしてくる。
その手を払いつつ、マリアは答えた。
「失礼ね。どうってことないわよ。…それよりどうしてここにいるの？馬車泊まりって…なんで侍従に化けているの？」
ニヤっと笑ってエリックは答えた。

「ちょっと捜査。」
「なんなの？でも前室に潜んで行ってもあまり特になるものはない気がするけど…」
「今年のデビューで一番美人なのは誰か、仲間内でかけていてさ。その事前調査なんだよ。」
「なにそれ！！わたしたちにすごく失礼じゃない！！」
「心配するな。俺はマリアに入れた。」
「そういうことじゃなくて…っていうかわたし！！エリック負けちゃうわ。今からでも遅くないから前室でもっとよく見て、美人に投票しなさいよ。」

そういうと、エリックはおもわず噴き出した。

「お前、かけをされていることにもっと怒るかと思ったら、俺が負ける心配かよ。」
「申し訳ないじゃない。あきらかに負ける勝負をさせるのは。」

「…どうして、そうやって自分を卑下するのかな。」

エリックの言った言葉がそれまでの軽薄な感じではなく、重みをもっていた。
マリアは彼の顔を見た。

「人を見るときには、容姿がすべてではないだろ。容姿ももちろんあるだろうけど、内面がすくなからず外面にもでてくるものだよ。俺からみれば、マリアは両面が優れていると思うけど。」

（そんなこと言われたことなかった。）

いつも、できのいい兄弟と比べられ、コンプレックスの塊だった。
（こんな風にわたしのことを言ってくれる人もいるんだ。）
涙がにじんでくる。
「っっ！泣くな。俺、そんな悪いことといったか？ここで泣いたら、顔が崩れて謁見で恥をかくぞ。」
涙を止めなきゃとおもったけれど、止まらなかった。
一筋涙がこぼれる。
「悲しいんじゃなくて、うれしいの。ありがとう。エリック。」
泣きながらマリアは笑った。
公爵令嬢らしくと意識しすぎて、こわばった笑顔ではなく、キラキラと輝いた太陽のような笑顔だった。
「そうやって笑えるんじゃないか。さっきの作り笑いより、全然、お前らしい。」
エリックもマリアに笑いかけてくれた。
“ドキッ”
マリアの心が高鳴った。
涙も止まり、顔も赤くなってくる。
（？？どうしてエリックの笑顔をみただけで、顔が赤くなってくる

のよ！！）

思わず、エリックから顔をそむける。

「どうしてそっち向くんだよ。…また顔が赤いぞ。本当に大丈夫か？？」

「本当に大丈夫だって。…泣いちゃったから恥ずかしくなっちゃったの！！気にしないで！！」

苦し紛れに答える。

（どうして！！今までエリックの方を向いて話ができていたのに、そっちをむけないよ。）

「ミーレッシュ公爵令嬢。どこにいらっしゃいますか？」

そこに謁見室の方から、自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「いけない！！謁見室にいかなきゃ。」

「すっかり忘れてたな。」

「忘れていたって。エリックが案内してくれなきゃ、謁見室にいけないじゃない！」

「それもそうだな。悪かった。」

マリアの名前を呼んでいた別の侍従に返事をし、エリックとともに再び謁見室に向かう。

謁見室の扉を開くとき、耳元でエリックにささやかれた。

「緊張がいい具合で解けただろ。」

（もしかして、わたしのこと心配してくれたの？）

心が温かくなった。

そしてマリアは笑顔で、謁見室に入室したのだった。

8．謁見のときの事件

謁見は表面上は何事もなく終了した。

何事もなく、終了した…

といいたいところだったが、ひとつ事件があった。

謁見室にいるのは、国王と王妃、王太子、侍従を含めた護衛の騎士だけである。

マリアにとっては叔父・叔母・従兄弟と幼いころ一緒に遊んでもらった彼らの護衛の者だ。

完全にホームである。

ことがおこったのは、口上が終わり、形通りのやり取りが終わったあとだった。

「マリア、髪型はシンプルでよくにあっているし、ドレスもマリアの愛らしさを引き立てていると思うし…レモンの香りも新鮮だね。」

檀上にいるのが普通なのに、マリアのそばにフレッドがやってきた。

もう、王太子と公爵令嬢のお話は終わりらしい。

「でも…これはどうしたの？」

頬をなでられる。

（やばい。気づかれた…）

「マリアの年頃にふさわしい薄化粧だけど…涙のあとがあるね……」
フレッドの口調がゆっくりになってくる。
「しかも、口紅も取れている…」
完全に雲行きがあやしい。
「フレッド兄様！！これはね…」
いいわけしようとすると、
「お茶を飲んだからとか、目にゴミが入ってちょっと泣いたからとかそういう言い訳は聞かないよ。」
（！！完全にいいわけ内容もばれてる！！）
速攻で先手を打たれる。
「涙のあとだけなら、前室にいる命知らずな誰かが、僕のマリアにねちねち何かを言ったのかなって思うけど…」
（命知らずな誰かって…しかも、俺のマリアって…）
独り言のようにつぶやいていく淡々とした雰囲気が怖い。
フレッドは他に兄弟がいないからか、マリアのことを実の妹のようにかわいがってくれている。
「口紅が取れていることを含めると…誰かがマリアの唇を奪った？？」

顔がポンと赤くなるのがわかった。

（く、くちびるを奪うって！！そんなんじゃないのに！！）

おもわず、エリックの顔を思い浮かべてしまう。

「あらあら、本当にいい殿方との出会いがあったの？」

「舞踏会もまだなのに、もう出会いがあったのか、マリア。」

王妃と国王も会話に参加してくる。

「謁見前までの間となると…騎士団のだれかか…」

完全に誰か特定しようとする雰囲気だ。

エリックは侍従に化けていたからそう簡単に見つからないだろうが、気づかれたら大変だろう。

「兄様、やめて。恥ずかしいわ。そんなのじゃないのよ。」

「でも、変な男だったらどうするんだ。僕は、マリアにはふさわしいお婿さんを見つけてあげるって決めているんだよ。」

「勝手に決めないでよ。しかもお婿さんって…。」

「当たり前だろう。マリアはかわいい妹なんだから、変な家やほかの国なんてもってのほかだよ。僕らの目の届く範囲で、いつも幸せに暮らしているってことを確認できなきゃだめだね。」

「わたしが思いあう人が別だったらどうするのよ。」

「僕とアーサーとテルスの権力をフルに使って阻止だね。マリアはかわいいからすぐに次のいい人がみつかるさ。」

国内の最高権力者に近いメンツ全員で阻止するき満々である。

売り言葉に買い言葉。
思わず謁見室だということも忘れて、マリアは叫んだ。
「それが運命の王子様だったらどうするのよ！！」
言葉の威力にみんなが、ポカンとなるのがわかった。
一瞬会話の間があく。
真剣な顔を作りつつ、フレッドがいう。
「一応、僕も王子様だけど…運命って…。」
こらえきれずに笑い始める。
「そんなもの信じるなんて…お転婆マリアも女の子なんだね。」
完全にバカにされている。
（運命なんて信じてるなんて、ガラじゃないのはわかっているわよ。）
「いいじゃないの。信じていたって！！しかも、謁見が終わったから、女の子じゃなくて、レディーとして扱ってちょうだい。」
頬を膨らましていうと、
「謁見室でこんなに叫んでいるのはマリアぐらいだよ。」

笑いこけているフレッドに指摘され、その的確な指摘にぐうの音もでない。
国王夫妻も笑っている。
せめて最後は、それらしくきれいに退室をと思い、意地で叩き込まれた礼をする。
（優雅に、きれいに、目をひくように）
フレッドの大爆笑を背にマリアの謁見は終了したのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9998s/

花冠の花嫁

2011年7月3日04時28分発行